1400 年の伝統「天王寺舞楽」を伝承　重要無形民俗文化財指定

出演者紹介

天王寺楽所雅亮会（てんのうじがくそ　がりょうかい）

「天王寺楽所」は「聖霊会（しょうりょうえ）」を中心に、四天王寺由縁の舞台で 1400 年にわたって、独特の舞態を持った天王寺舞楽を伝承してきた。「聖霊会の舞楽」は重要無形民俗文化財に指定されている。明治維新以降は、明治 17 年に設立された「雅亮会」が、旧天王寺楽人から伝授を受け、天王寺舞楽の伝統を受け継いだ。現在では、四天王寺から「天王寺楽所」の名称使用を許され「天王寺楽所雅亮会」と名乗り、聖霊会の舞楽をはじめ、四天王寺における法会舞楽、住吉大社、嚴島神社の奉納舞楽に毎年参仕し、大阪フェスティバルホールで毎秋自主公演会を催している。海外公演としては、昭和 53 年のアメリカ・カーネギーホール公演を皮切りに、ヨーロッパ各国、ニュージーランド、韓国、中国、チェコ（大統領臨席）など多くの国に天王寺舞楽を紹介した。大阪府芸術祭賞、大阪府民劇場賞など、数多くの受賞歴を持っており、令和 2 年には伝統芸能ポーラ賞（地域賞）を受賞した。平成 26 年には楽頭であった小野功龍が恩賜賞・日本芸術院賞を受賞した。

演目

第一部（管絃）

平調音取

管絃や雅楽の歌謡である催馬楽などの合奏のおりには、当曲の演奏に先立って必ずこの「音取」が演奏されるならわしになっています。

林歌

右方高麗楽に属する舞楽曲である「林歌」を管絃の演奏スタイルに移した「渡物」の曲で、高麗楽が管絃曲に渡された大変希少な曲です。管絃の編曲においては、楽箏の演奏が華やかで技巧をこらしたものになっています。

第二部（舞楽）

甘州

この舞楽は唐の玄宗皇帝の作とも又今日の中国の甘粛省あたりの土俗舞踊が伝わったものともいわれていますが、その後わが国において大幅な改変の手が加えられたと考えられている舞楽です。左方襲装束で「両肩袒」、頭には巻纓冠を着けた姿で四人の舞人によって舞われます。天王寺舞楽の甘州は「調子」、「甘州破」、「早甘州」の三部からなり、最後の「急」の章にあたる「早甘州」はこの天王寺楽所にのみ伝わるもので他では伝承されていません。舞の振りの中には「稲刈手」や「種播手」といったこの舞独特の舞の手がみられます。

還城楽

この曲は、蛇を捕って喰う胡人の姿を模したものともいわれ、「見蛇楽」とも称されました。当曲では、蛇をもって喜悦する様が動きの激しい舞い振りで演じられます。当曲のリズムは二拍子と三拍子の複合拍子である「夜多羅拍子」で演奏されます。このリズムは往時の四天王寺楽人が二拍子と四拍子の複合である「只拍子」を発展させて考案したものと言われています。また、四天王寺では、番舞の抜頭を右方の舞とすることから左方の舞とされます。当曲後の入手でも、テンポの速い「安摩乱声」」に合せて、さらに激しく舞いながら退場します。大変動きが激しい一方で、繊細な動作も要求され、天王寺舞楽の理念を体現した舞楽曲であるといえます。

解説・出演

小野真龍（おの しんりゅう）　天王寺楽所雅亮会理事長・一般社団法人雅楽協会代表理事・関西大学客員教授

京都大学文学研究科博士課程（宗教学）を修了。宗教哲学の研究で京都大学博士（文学）となり、相愛大学人文学部特任准教授を務める。その後、小野妹子の八男を開基とする浄土真宗本願寺派願泉寺の第 44 世住職を継職して現在に至る。主な著書に『ハイデッガー研究』（京都大学出版会）、『雅楽のコスモロジー』（法藏館）、『天王寺舞楽』（法藏館）などがある。
雅楽人としては、幼少より四天王寺「聖霊会の舞楽」の童舞の舞人を務め、天王寺楽人の道へ。1993 年より天王寺楽所雅亮会の会員となり、「聖霊会」をはじめ四天王寺の由縁の舞台で雅楽演奏・演舞活動を行う。雅亮会の後継者育成機関や、相愛大学等で雅楽実技も指導している。